

傳侯家莊古墓出土印影ある黃土塊片



史

林

第二十七卷 第四號

(通卷第一百七號) 昭和十七年十月發行

## 支那青銅器時代再論

——特に彰德府外の發掘品を中心として——

梅 原 末 治

一

河南省彰德府外の小屯を中心とした殷墟の發現は支那金文學の研究に一新紀元を劃したばかりでなく、支那の考古學に輝かしい發足點を與へて、特色あるその國の古文物の實相を闡明する上に大きい寄與をなしたことは、昭和三年(民國十)以降の同遺跡學術調査の業績が明示する所である。我國に於いて早くこの遺跡の持つ重要性を認められた故内藤・濱田の兩先生に教へられ、その驥尾に附して該遺跡と出土品とに關心する様になつた筆者は、右の學術調査が續々と新事實を學界に提供し出した昭和九年の頃「支那の青銅器時代に就いて」なる一文を草して本誌上に掲載を請ひ、是等出土品の通觀から、それまで考へられて來た殷墟を以て石金併用期の低い文化段階にありとする見解に對し

て、全く別個な解釋を加へるの要を感じ、之を當時見見に上つた支那上代遺物特に古銅器の示す事象と比較考察の結果、寧ろ青銅器時代の後半期か或は鐵器文化の初期と見ることの一層妥當なるべきに考へ及んだのであつた。かくて右の所見を中心として遡つて金屬文化の起源に關する推測を試み、通じて從來の所説と著しくかけ離れた文化觀を描いた次第であつた。

如上の一文に就いては故濱田先生から直ちに、同遺跡から多數に出土する石庖丁に何等觸れる所ないのは立論を弱めるものであるとの教示を受けた。もと／＼右の所見は極めて不十分な根據の上に樹てた大膽な臆説である點で、論證に當を得ないものゝあるべきは筆者の自認した所であつた。さればその全文が間もなく胡厚宣氏に依つて支那文に譯述せられ、また獨逸のキェンメル博士、白耳義のヘンツェ教授の注意に上つて、金釵元氏の獨譯が伯林の『東洋美術雜誌』(Ostasiatische Zeitschrift, Neue Folge XII)に掲載せられたことは、廣くその所説が東西學者に検討せられることに役立つものとして筆者の本懐とした所である。處がこれ等に就いてなほ著しい批判を受けないでゐる間に、小屯を中心とした遺跡の發掘が續々好果を收めて、今次の支那事變發後の直前に及び、特に昭和九年秋から實施の侯家莊西北岡に於ける古墓群の大發掘は、殷墟に對する當代の墳墓たるの實を示し、是等からの夥しい出土品が當代文物の性質觀に劃期的な資料を提供して、その前後支那學者の山東、河南、山西等各地に於ける史前遺跡の發掘調査の結果と相俟つて、筆者に如上の所見を修築するの必要を痛感せしめることになつた。たゞこの場合不幸なことは、如上の諸業績が公表されるに先立つて支那事變が勃發し、それが今や大東亞戰となつて、爲に殷墓の大發掘の如きい

たづらに名のみが高くして殆んど實情が傳へられず、延いて我國では現在なほ二十餘年前の知見のみを以て殷墟を律しようとする人士をすら見受けることである。されば筆者は上記の一文を公にしてから常に所謂殷墟の發掘經過に留意して、新事實の紹介につとめると共に、それから考へられる文物の性質觀にも及んだのであつた。『河南安陽遺寶』河南安陽遺物の研究等に於ける論述はその二三に外ならぬが、其後更に南京に遺棄せられた關係遺物の整理に關與し、また發掘を行ふた國立研究院の年度報告を讀むに及んで、うちに上掲の所見を補足修築するに役立つものがあり、彼の特色ある支那古銅器出現の問題に就いて、推測の歩を進め得るものあることをも思ふに至つた。即ちこゝにその概要をつゞつて重ねて、本誌の餘白の割愛を請ふて、嚮の一文の補説とする。

## 二

早く注意せられた殷墟の出土品に多數の石庖丁の存することは廣く一般に知られてゐる處であつて、割合に粗造な一見録の如きその器形は觀者の注意を惹くに足るものがあり、延いて當初遺跡を以て石金併用期とする假説に一つの據所を與へる様になつたのは理由のあることである。この種石庖丁は其後の學術發掘に於いても多數發見せられたのであつて、筆者が實地に臨んだ昭和四年秋の第三次の發掘に於いては、或局部から二百數十と云ふ多數が一括出土して、發見遺物中著しい一類たる印象を強めた次第であり、更に事變後南京に遺留せられたこの類が非常な數量に上つてゐることがよくそれを裏書きする。併し他方學術發掘の結果甲骨文と共に多數に見出されるに至つた土器、骨角器、

玉器、銅器、鎔范片等に於いては、通じて一つの性格を持つてゐて、それ等が右の石庖丁の示す所と著しく差異のあることが明瞭になつて來たことは、これが同じ遺跡から隋唐の遺物や、また彩陶片乃至純然たる石器類の出土する點などと併せ顧みられて、石庖丁と如上の特徴ある類との共存の事實が確められぬ以上、既に攪亂せられた形迹の多い本遺跡に於いて、單に同じ地區から出土すると云ふばかりで直ちに兩者を同一時代の所産とするの危険なることが感ぜられるのである。これが灣の論文に於いて隋唐の遺物と共に石庖丁の問題をば暫く留保してそれに觸れる事なく通じた一つの性格を持つ上記諸種の器をば所傳の時代に結びつけて、新しい見解を組立てる基礎とした所以であつた。

處がその後の調査に就いて梁思永氏の報する所、小屯に相近い後岡に於いては、白陶を含む所謂殷後半の文化層——これは前論に於いて一つの共通した性格を持つとした遺物群に相當するものである——の下に、黑陶・彩陶なる特色のある土器を含む二つのそれよりも古い文化層の存することが確められたと言ひ、石庖丁を以てこの古い二つの孰れかに結びつける可能性が推される様になつたばかりでなく、更にその大半は既に盜掘の厄に遇ふてゐるとは言ひながら、彼の侯家莊西北岡に於ける無慮千二百餘の古墓の殘存遺物の示すところは灣に取り上げたと同じ類に限られて、その性格を一層鮮かに具象してゐることが確められる様になつた。而してうちに時に見受ける石器は、良質の材よりなる斧、鉞、又は玉戈に限られて、問題の石庖丁の類を見ないことから、同じく小屯より出土する彩陶などと共にそれをば所謂殷墟物と區別して取扱ふことの妥當さがよりよく認められるに至つた。たゞ既に觸れた如く昭和八年以降發掘の是等の重要な事實の報告はすべてなほ公にされて居らず、且つ理下の非常時局に於いて近き將來にその發表を

期待することも出来ない。されば是等の出土品を目撃した少數者は別として、既知の見に従ふ人々にとつては發掘品の示す著しい事實を率直に受容れることの困難なる事情は依然として除き難い。この場合新たに矚目した中央研究院の年度報告は簡單ではあるが、當初から事變の前年までの發掘の經過を録して、問題の小屯地區にあつて時代の異なる遺構の並び存することを指摘してゐるのは注目す可きであつて、右の是正に役立つものと考へる。

殷墟として知られた小屯地區の發掘が進むにつれて、從來の濫掘に依る層序の攪亂された間から、時にそれを免れた處女層が出て來て、うちに遺物を藏した單純な竪穴の外に、規模の大きい版築の建物の基壇などが現はれ、その上に礎石を遺存して、精巧な遺物に相應する遺構をなすことは既に『安陽發掘報告』の第四冊に紹介されてゐるが、年度報告には同様の遺構がその後も引續いて検出せられた事實を擧げてゐる。即ち昭和七年(民國二)秋の第七次の發掘に於いて長さ六十米に上る版築の臺基の上に均整に配列された石柱礎の遺存するものを掘出したのをはじめ、翌年(民國三)秋の第八次にあつては、同じ構造の房屋基臺が東西に二つ見出されて、東の方は長三十米、寬九米、西は長二十米、寬八米を測り、前者の上には石礎の外に鑄銅の礎十個があつたと云ふ重要な事實を録し、西方の基臺にあつても、その版築下に黒陶時代の穴居の大圓坑が存在した事を記して時代を異にする遺構の相重なつた存在を明示してゐる。これは當初考へられた遺跡の單一性の當らなかつたこと、従つて出土品に見る相互に違つた類をすべて同一年代と視ようとする所論の事實に反することを裏書きするものであらねばならぬ。なほ同じ遺構は昭和十一年(民國二)春の發掘に於いても引續き三基見出されて、同じくその石柱礎の配列に序があり、是等を通じて殷代地表面上の建築房

屋の配置なり範圍なども推測し得る望みの生じたことを記してゐる。なほこの季節の發掘では別に二百二十七と云ふ夥しい小灰土坑を調査したことを擧げて、

每坑自爲一組、其中出土之陶片等物、皆可據以定先後時代。

と記してゐるに至つては、いよく遺構に依る遺物の相違を物語るものと云ふ可きで、小屯でも梁氏の傳ふる後岡地帯に於ける層序に依る遺物の差異に相應するものあることを思はしめるのである。

なほ同じ期間の發掘に於いてC區で見出された徑約二米、深さ四米の一圓坑(報告には一一三坑とある)では、坑内に龜版を貯藏した原形をとゞめてゐたとあつて、別個の興味を喚ぶものがある。これは民國二十三年の春侯家莊の南で完整刻字龜版七塊を發見した事實を遙かに超へた重要な發見で、ペリオ教授がハーバード大學にて試みた「殷代の王陵」なる講演筆記の末尾に附記してゐる傅斯年氏の傳へた所に相當のものに外ならぬ。次に年度報告から關係の記事を引用してその一斑を推すの資に供へる。

坑内滿貯完整之龜版文字、積疊成層約一公尺餘厚、堆積情形極爲完好、全坑共得龜版萬餘片、可完成全龜在二百版以上、爲甲骨文出土以來之奇觀。

### 三

小屯地帯に於ける出土品中、通じた一つの性格を備へた類として筆者が取り上げ、甲骨文との同時性を考へて所傳

の股壚と結びつく遺物となし、嚮の立論の根據とした見解に對して、その妥當性を端的に示したものが侯家莊西北岡に於ける古墓群の出土品であることは既に觸れた如くである。この侯家莊の古墓に就いては早くベリオ教授クリール氏等の記述があつて、その一斑が傳へられて居り、筆者また昭和十一年春南京に出掛けて出土品を目撃、兼て發掘者の談話に基いて、これを紹介したのであつた。いま研究院の年度報告に依つて一層その状況を明瞭にし得るものがあるのは、支那考古學に關心する者の特に有難く感ずる所である。尤も民國二十三年九月末から着手、翌年春秋の二期を通じて行はれた同地に於ける大規模な古墓發掘の概要を記することは、この小文の範圍を超へるのでこれを別の記述に譲るの外はない。併し調査せられた千二百餘の多數の古墓の示す所要約すると、是等は孰れも地表下に營まれて、上に封土などの遺存するものがない。その主體の構造は二つに大別せられて、一つは墓道を伴ふた木造の槨室より成る極めて規模の大きいものであるのに對し、他は遺骸を伸展葬するにふさはしい矩形の墓壙を主とする類で、後者が大部分を占めて、兩者の間に構造上稍々著しい違ひが認められる。尤も兩者の副葬品は大墓に特に觀る可き類を含むが、而も古銅器其他に相通するものが多い點から、後者が身分の左程高くない人達の與城たるに對して、前者は支配階級たる權力者の墓なることが推され、そこに發掘者の股の王陵とする解釋が成立つのである。

以上の主體たる埋葬に對して、發掘調査に依つて明にせられた著しい別個な事實は殉葬の存在である。即ち大きな墓の墓道並に上邊に於いて頭骨のみの並列、肢體のみの埋葬が認められ、規模の小さい墓の内容にも同様な類の少ないことが記されてゐる。方形に近い坑に頭骨のみ十個を埋葬して副へるに銅鈴一個宛を以てしたもの、如き、或は



横長の墓坑に頭のない體軀のみを並列した墓坑など、極めて特殊な葬法を示す實例が可なり多く見出されたことを擧げてゐるのは、當代の葬送を考へる上に新資料を提供す可き重要な事實と思ふ。而してそれがたゞに人體に限られず各種の獸類から禽鳥にも及んでゐる點で一層の興味を加へる。獸類中最も多いのは馬を瘞めたものであつて、中に裝具を施した三十七頭を埋めた壙の如き最も著しい例とせられるが、珍らしいのは象を葬つた壙が二つも檢出せられたことである。その一つは南北の長さ五・二米、幅三・五米、深さ四・二米の大きな坑中に大象一匹に象奴一人の骨格が完存して、埋葬當初の面影をとゞめてゐたとあつて、墓が營まれた當時に黃河の北のこの都に象の飼育せられてゐたことを物語るものがあるのは吾々の常識を遙かに超へた事象である。

さて是等多數古墓の發掘調査に於いて、小規模な遺跡を除く他大部分は早く盜掘の厄に遇ひ、特に大規模の陵墓に於いてその災の甚だしいことが知られた。併し遺跡の位置が地下深くにあり、且つ規模の上からその悉くの遺物を取り出すことが困難であつたと見え、うちに重要な副葬品を殘存するものがあつて、これ等が上記内容の完存した小墓の出土品と併せて支那古代遺物の研究上に劃期的な資料を提供したのである。年度報告は是等をはその質料の上から、銅・石・玉・骨・牙・蚌等の諸器に分ち、更に陶器の特殊な遺品に及び、特に主要なものを列記してゐて、銅製品と石製品とに最も著しい類を含んで、從來の支那古代遺物に關する知見を更新するに役立つものがあること既に説かれてゐる如くである。是等の出土品を通觀する幸を持つた筆者の所見からすると、使用せられた諸種の材料の上に當代の工藝技術の驚く可き發達が認められると共に、他方にあつて是等が通じて一つの性格を具へて、それが言はゞ

支那古銅器を特色つける非實際的にして繁褥奇怪な動物文の裝飾に特別な技巧を發揮してゐると規を一にするものがあることである。

新に見出された多數の銅器が右の特徴を具象するばかりでなく、大理石・骨角などの違つた材料で作られた容器までが全く同様である事實は、早く知られた白色土器の或者に見られる同似と並んで、か様な著しい面を端的に示すものである。珍らしい大理石の彫像に於ける裝飾文の如き、また彫琢の精を究めた各種の佩玉や骨牙を以てした梳、櫛等に於ける裝飾、發達した特殊な利器形の戈・鉞・斧等の部分に見る加飾も全く同じ趣を備へてゐることは寧ろ奇異の感を懐かしめる程である。この様な著しい性格、而もそれを表出するに技術の巧緻を盡くした遺物は、言ふまでもなく金石併用期など稱すべき段階を遙かに越へた時代の所産たること疑を容れる餘地がない。處がこれこそ従來殷墟出土の斷片に見出されてゐた所を明確にしたものに外ならぬ。されば溝の論述の根據は新發見に依つてよく裏書きせられたと言ひ得るのである。序に附記するが古墓出土の窯器類は灰陶を主とするが、時に白陶片を見受け、また一基から帶釉陶器の發見を記してゐて、是等が如上性格の諸遺品と共存した窯器たることを推さしめるのである。

#### 四

如上古墓の學術發掘の結果夥しく資料を加へた所傳の殷墟と結びつく一插遺物は、孰れも溝の所論を裏書きするのみならず、更にその特徴を一段と明確にし結局に於いて當代工藝技術の表現する所が従來古銅器に見出された特色を

極度に發揮したものと云ふことに歸着する。第一〇〇四號大墓に残存した二個の大きな方鼎と、我が根津美術館に藏する侯家莊古墓發見の三器一具の方盃とは、この點を端的に物語るものであつて、是等の上に尊彝としての最もゆたかな様相が示されてゐる。然るにその器形たるや日常の容器と認められる當代の土器類、即ち支那學者の言ふ灰陶の示す所とは可なりかけ離れてゐて、非實際的な趣が多く、また器形と殆んど不可分になつてゐる通體の施文が、怪異にして繁縟を極めたもので裝飾の域を遙かに超へてゐることも著しい特徴とせられる。而して同様な特色を持つものが、大理石や骨角などでも作られて居り、更に白陶のうちにも見受けられて、是等の同時性が墓壙の出土品に依つて考古學的に認められるに至つた事實は、同じ土器のうちに普遍的な灰陶と並んで、古く彩陶からはじまつて黒陶、白陶などの作られてゐた點と併せ觀ることに依つて、一般常用の容器のうちから文化の發達に伴ひ、支那古代民衆の思想信仰等の特殊な雰圍氣のうちに於いて、か様な別個な類の發展があつたと見る可きことが考へられる。然らばそれは當然支那古文物に於ける一つの大きな特色と云はねばならぬ。この事は筆者が前稿に觸れた青銅の利器に他の古文化圏に於けるとは違つた發展形態のあることや、同じ地區の出土品に既に實用を離れた明器と認むべき遺品が實用の利器と並び存し、その明器類の質料が他と異なる點なども相應する。かくて傳稱の殷墟の示現する文化段階はこれ等から單に工藝技術の方面ばかりでなく相當に進んでゐたことが立證せられる次第である。

安陽を中心とする中央研究院の發掘はこの様に筆者が前文に於いて描いた大膽な所見に對して、それを肯定する側の多くの新知見を齎したものであると共に、同時にまた所傳の殷の後半に先立つ文化段階に就いても數々の新しい考

古學上の事實を示した事は初に觸れた如くである。然るにこの明になつた時代の遡る遺物に於いては、黒陶並にこれと並行する一群の容器中に古銅器の或者、例へば特色のある觚や、盃などの祖型と見る可き類を含んでゐるとは言ひながら、利器を除いては銅容器の遺存例を聞かない。これは民國二十五年春同じ中央研究院の調査した山東省日照兩城鎮に於ける黒陶期の墓葬の場合でも同様であつて、上記殷の後半に見る銅器の先行形式は今日なほこれを現實に辿り得ない實狀にある。されば現狀に即する限り、古くからつゞいた文物の發展段階を辿り得る彰德府附近の地區に於いて、最も特色ある銅容器の形態が所傳の殷時代に突然として出現し、而もそれが極めて精巧な作品をのこしたとする甚だ奇異な現象を以て實際の様相と見るの他ないことになる。處がこれは亦前文に於いて從來の知見から導いた推測に全く合致するものである。

筆者は嚮にか様な特殊な現象の解釋として、古銅器の示す圖文表出の手法が土器的でなく、木彫に相通する所の多いことや、器形を構成する稜・鋸などの示す技巧等からもと木器として發達して來たものが、青銅の豊富を加へるに至つて、その形をば右の新しい質料で作つたとする一つの假説を描いたのであつて、これが傍證として未開人の間に特殊の木器の製作の盛な事實を擧げて置いた。たゞ木製の器類は材質の關係から腐朽し易く、爲に右の見解を實證する様な遺品の發見に對しては筆者自ら多くの期待をかけ得なかつたのである。然るに侯家莊西北岡古墓群の發掘に従事した梁思永君以下諸氏の現地に於ける周密な作業が、右の木器の遺存をば現實なものたらしめることになつたのはまさに特筆大書すべきである。尤も出現した遺存物は木器の形狀をとゞめたものではなく、實體はとくに失はれ去つ

て、僅にもとそれに接觸した細密な黄土堆積の面上に形迹を印するに過ぎず、従つてもと器に施された賦彩のみが目立ち、本來布等に描かれた一種の繪畫の名残と見るペリオ教授の所説を生ずに至つたのであり、また年度報告にあつても、これをば一種の儀仗と解して、次の如く記してある。

原物已全部腐化。所餘者惟原物所塗之紅色、所鑲嵌之石片蚌片、及所刻之浮雕花紋之印痕。保存最佳者爲一一一七六墓西道中蟻皮鼓及附屬物件、及一一〇〇大墓西道中之鳥飾槓及虎飾槓。

併し南京に遺置せられた是等の毀損し易い遺物に對する應急の處理に當つた筆者の寶物に就いての觀察からすると、その凹凸の著しい黄土面の印影並に嵌入せられた石・蚌・牙片の具合等よりし、またその面に接して僅に残存した黒色の物質などから判ずると、木彫の印影たるに殆んど疑がなく、更に多數の斷片の中からもとの器形として現實に數個の豆(高杯)を復原することが出来た。そしてこの豆の示す形態たるや曰陶に見るものと全然同じく、またその上に古銅器と全然同一の饗餐文乃至巴狀渦文帶を浮彫したものである。然らば多數の出土品中にはよしやすべて木器の印影と斷じ難い類を含むとしても、如上の遺例から當代木器の存在は實證せられたと云ふ可きであり、兼てその示す所から問題とした古銅器との密接な關係も肯定せられて、筆者の曩日の所見に有力な微證となることは斷言してよいと思ふ。

如上の木器の痕迹と認むべき黄土塊の實際並に筆者のそれに就いて調査考察した詳細は、他日遺品の保藏されてゐる南京の行政院文物保管委員會から公刊せられる豫定であるので、いま發表の自由を有せないが、幸にも右の調査に

先立つ昭和十四年初夏の候に、大阪の淺野稔吉氏が、新たに掘出された全然同一痕迹の斷片をば北京より帶歸し、筆者の觀察の資料に提供して呉れた。この黄土塊は固より原形を推測するに甚だ遠い斷片ではあるが、問題の遺品と全く性質を一にして居り面上に印した動物文の凹凸のある所、よく木彫物の印影たる實際を明示するものがあるので、こゝに寫眞(口繪参照)を掲げてその一端を傳へるの姿に供へる。

## 五

以上は嚮の論述に對して侯家莊古墓發掘の齎した新知見に依つて實證修補し得ると思惟した主要な點を擧げたのであるが、その結果として當然要請せられるのは、所謂殷墟殷墓の示す時代に於いて、從來別種の質料たる木などで作られて特殊な發展形をとつて來たものが、青銅にかへられ、遂に古代文化圈に於いて最も特色の著しい尊彝なる青銅器を見るに至つた轉換の理由に對する解釋であらねばならぬ。この問題は既に前回に於いて論觸した處であつて、嚮の一文並にその後公にした『支那古銅器形態の考古學的研究』にあつては、右の解釋として單に當代以前既に支那の中原は青銅器時代の文化段階に屬し青銅の利器が多數に作られ、鑄銅の技術に習熟してゐた。それが當代に入つて特殊な事情から青銅が多量に得られることになつたか、或は鐵が新たに利器の質料として知られるに至つたなどの理由の爲に、青銅の使用が多方面に及んだ一つの表はれであらうとした。即ちその所見は全く概念的なもので想像の範圍を出でないものであつた。さて今日と云へどもこれ以上に所論を進め得る考古學上の據所を持たないが、而も如上の所

謂特殊な事情に對して、一つの推測を描くの可能を思はしめるものがあつて、それがまた侯家莊古墓の新知見に負ふてゐる。この新知見と云ふのは侯家莊西北岡の古墓中に現實に象を陪葬したものゝ存することゝ、他方殷墟殷墓を通じての出品土に特に加工した子安員の彫しく遺存する事實とである。

前者に就いては今日なほ上に記した以外に詳細を究め難いのを憾とするが、それは早く古墓の營まれた時代、換言すれば特殊な性格特徴を持つた遺品の作られてゐる時に、黄河の北の地區に南方熱帯産の象が飼育せられてゐたことを如實に示すものであらねばならぬ。處が所傳の時代と今日との間に東亞の氣候なり生物界にさして著しい差異があつたとなし難い見地からすると、右の象は南方地方から移し飼はれたと見るの他はなく、延いてこゝにそれを可能ならしめた條件、即ち當代に於ける象の棲む南方の熱帯地と、支那の古代文化の中樞地區の間に交通關係のあつたことが肯定せられなければならぬ。殷墟からは早く象牙加工品の出土が注意に上つて、それから一部人士の間に南方との交渉が考へられたのであつたが、この様に生きた象が黄河の北にまで搬ばれたことになると、その交渉たるや間接的なものでなく、可なり緊密であつたことが考へられて來る。

第二の加工した子安員の出土はこれ亦早くから知られてゐた處であるが、從來それ等が果して所傳の時代と結びつくものなりや否やに就いては疑が挿まれた。江上波夫君の如きは嚮に支那古代に於ける子安員の流傳を説いて支那に古く南方産の子安員の流傳を認め乍らも、この殷墟出土品に就いては層序の明ならぬとの理由を以て除外するの立場を執つた〔同書「極東に於ける子安員の流傳に就いて」。さり乍ら嚮に南京に遺置された遺品の整理に従事した筆者は、一

斗一石を以て量らねばならぬ夥しい出土品に接して全く一驚を喫せざるを得なかつた次第であり、上述の所謂儀仗中に同じ子安貝が嵌入せられてゐる事實や、また別に中央研究院の手で清理せられた潯縣辛村古墓群に於ける同種遺品の著しい存在(郭寶均氏「潯縣辛村古墓群之清理」)などから、これを古銅器の銘文乃至禮經の記載に併せ見て、所傳の時代のものとするに殆んど疑ないと思ふ。是等多數の子安貝が果して貝貨として用ゐられたものかどうかには就いては、なほ問題があつて、右の儀仗中の或者並に辛村古墓に於ける遺存状態は現實に裝飾として用ゐられた著例と見られるのであるが、南方産の子安貝がかくも多數に遺存することは、異邦の珍物として當代人の趣好に投じたことを物語るものと言ふ可く、そこにまた或者の貝貨たる可能をも考へしめるのである。而して同時によしや將來の徑路に就いては江上氏の説く如きものであつたかどうかは議す可しとするも、當代この地と南海との交渉のあつたことをも肯定せしめる有力な徴證となる事を信ずる。

南方支那乃至南方地域が支那の中原と緊密な關係に立つに至つたのは、戰國以降の事であるとは一般に歴史家の説く所である。併し殷墓出土品の示す考古學上の事實はか様にそれよりも遙かに遡る時代に兩者の交渉を認めざるを得ないことになつた。これは支那古代の文化を放へる上に全く新しい知見と言はねばならぬ。いま右の新事象をば試みに問題となつてゐる古銅器出現に聯關せしめると、象の棲む南方地帯ビルマ・マレーから南支那の雲南・貴州の地方は現在に於いて銅鑛並に錫鑛、換言すれば青銅の産地として著しい所である。従つて右の南方との交渉は自ら是等の將來をも考へしめて、問題解釋に新しい鍵鑰たるを思はしめることになる。殊に支那中原に産出の乏しい錫が



同地に多い事實は、その將來に依つて著しく青銅を豊富ならしめたとする推測を描かして、こゝに南方との交通路が開かれ、か様な鑛産の將來が、もと木器などで作られてゐた器を青銅に代へるに至つたのではあるまいかとの解釋を加へしめるに甚だ好都合に見えるのである。

描かれた右の解釋の當否は、問題とする南方地區の鑛産の由來が究められるまで、單なる臆測の域を出でないこと言ふまでもないのであり、而もそのことの頗る困難なるものあるに顧みて、或は永く一個の想像説たるにとゞまるの他ないかも知れぬ。併し他面に於いて所謂殷代の各種古銅器の化學成分が檢せられ、その合金の挾雜物が認められることになれば、南方地方の現在の銅鑛乃至錫鑛の含む挾雜物との比較の上から別個な一つの實證を得ることの可能性が考へられる。さればこの分野の開拓に希望がかけられる次第である。

之を要するに本項説いた推測説は從來の一般通念とはあまりにかけ離れてゐて、俄かに多くの人士の賛同を得難かる可きことは、いまなほ殷墟石金併用期文化段階説が一部に信ぜられてゐる我が學界の現状よりして筆者の豫期する所である。併し所謂殷墓出土品に依つて明確の度を加へた當代文物の特殊な様相が上に挙げた如く、また侯家莊の古墓に象が二匹も葬られてゐた事實から當代北支那に象の飼育せられたことは動かし難い。なほ外にも南方文物の流傳を示す遺品を含むに於いて、是等に立脚した考古學上の解釋として、それは極めて大膽ではあるが、同時にまた一つの可能なものである可きを思ふ。而して妄りに既往の通念に囚はれる事なく、實物に即して新見解を立つることこそ考古學の面目を發揮するものであつて、殆んど文獻の徵證を缺き、爲に未開拓な支那の古代の文化の實狀はかくして

はじめて闡明の度を加ふ可きを私かに信ずるものである。

この一編の要旨は去る四月十八日本會例會で試みた「東亞考古學に關する二三の問題」なる講演の後半に相當する。但しそれをば嚮に發表した所説の再論として起稿した爲に、所論に變りはないが、初に若干の新しい部分を加へた他、結構の上にも差異を生じた。前號の彙報欄に右の講演が本誌上に掲載せられる筈と記してあつたので發表に當つてこの點を附記して置く。(昭一七・八・二三)